

アステイオンは
昭和の終わりから
平成をどのように
論じてきたか

アステイオン 創刊30周年 ベスト論文選 1986-2016 冷戦後の世界と平成

2017年秋
刊行

東浩紀
五百旗頭真
池内恵
猪木武徳
猪木正道

梅棹忠夫

大宅映子

奥本大三郎

苅部直

河合隼雄

北岡伸一

高坂正堯

佐伯啓思

佐伯順子

酒井啓子

司馬遼太郎

高階秀爾

田所昌幸

ダニエル・ベル

張競

半藤一利

藤森照信

細谷雄一

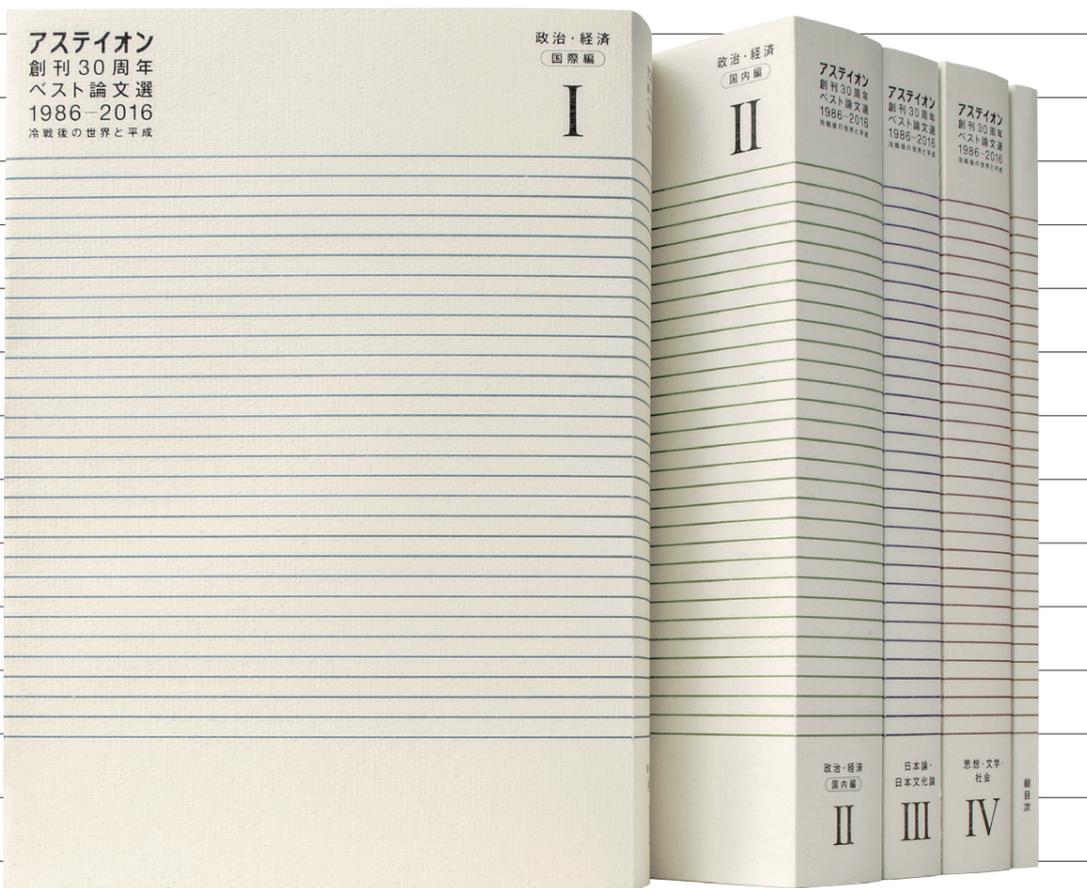
待鳥聡史

三浦雅士

御厨貴

山崎正和

鷲田清一...etc



- 第 I 巻 政治・経済 (国際編)
- 第 II 巻 政治・経済 (国内編)
- 第 III 巻 日本論・日本文化論
- 第 IV 巻 思想・文学・社会
- 総目次 (総目次/アステイオン・グラヴィア/特別企画)

A5並製 全4巻+総目次
(総頁数2738+輸送用ケース)
定価:本体 35,000円+税
*分売不可。
*告知内容は変更になる場合があります。

CCCメディアハウス

総監修者

山崎正和 やまざき・まさかず

1934年生まれ。劇作家。京都大学大学院美学美術史学専攻博士課程修了。関西大学教授、大阪大学教授、東亜大学学長などを歴任。1963年『世阿弥』を発表し岸田国士戯曲賞を受賞。その後も『オイディプス昇天』(戯曲)、『鷗外 闘う家長』『柔らかな個人主義の誕生』(評論)などで受賞多数。文化功労者。

田所昌幸 たどころ・まさゆき

1956年生まれ。京都大学大学院法学研究科中退。姫路獨協大学法学部教授、防衛大学校教授などを経て、慶應義塾大学法学部教授。専門は国際政治学。著書に『「アメリカ」を超えたドル』(中央公論新社、サントリー学芸賞)、『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』(編著、有斐閣)など。

編集 CCCメディアハウス 編集協力 サントリー文化財団・アステイオン編集委員会

アステイオン創刊について

『アステイオン』は、まだ知的営みがイデオロギー対立によって息苦しいものであった1986年に発刊されました。以来、氾濫する時事的な論説から多少距離をとって、世界の様々な問題を鋭く感じ、柔らかく考えることで、現在の諸潮流を組み取ろうとしてきました。誌名の『アステイオン』とは古代ギリシャ語のΑΣΤΕΙΟΝで、「都会的な」「洗練された」という意味を持つ言葉です。この誌名には、多様で自立していても公共空間をとる仲間として、真剣でも節度ある意見が活発に交換されること、つまり知の社交を促したいという想いが込められています。

アステイオン編集委員会委員長 田所昌幸

申し込み書	アステイオン 創刊30周年 ベスト論文選1986-2016 冷戦後の世界と平成 ISBN978-4-484-17213-2 C0030	ご注文数	書店印
	お名前	冊	様
	ご住所 〒	—	
お電話番号			

問い合わせ (株)CCCメディアハウス 〒153-8541 東京都目黒区目黒1-24-12
販売局 TEL:(03)5436-5721 FAX:(03)5436-5759
http://www.cccmh.co.jp/

内容に関する問い合わせ TEL:(03)5436-5716
FAX:(03)5436-5747
(書籍第一編集部)

第Ⅰ巻

政治・経済 国際編

高坂 正堯	粗野な正義感と力の時代
岡崎 久彦	イスラムの友から
永井 陽之助	脱工業化イデオロギーの終焉
中西 輝政	イギリスの知恵と「悪知恵」
猪木 武徳	アメリカの底力を探る——文明衰亡史観を排す
山内 昌之	ホメイニーとゴルバチョフ——イスラム革命とソ連
入江 昭	国家史から国際史へ
ダニエル・ベル	知識人の決闘——サルトルとアラノ
ラルフ・ダーレンドルフ	「一九八九年革命」の宴のあとで
北岡 伸一	涙の谷をこえて
竹中 平蔵	東欧の「ヨーロッパ」への回帰
三浦 雅士	西洋的伝統——その普遍性と限界
長尾 龍一	アメリカニズムの終焉
佐伯 啓思	——リベラリズムとテモクラシーの葛藤
猪木 武徳	統合の夢を醒ますもの
青木 保	アジア・ジレンマ
富永 健一	文化の多様性と二つの資本主義
	——ゲイ・インシヤト・キビタリズムの提唱
山内 昌之	イスラムとアメリカ
	——自由と民主主義をめぐる非対称
梶田 孝道	現代ヨーロッパをどう読むか
	——「文化的多様性」をめぐる
福田 和也	F・D・ルーズベルトの登場——アジアに根ざした政治
	——冷戦後の世界秩序を展望して
佐藤 誠三郎	文明の衝突か、相互学習か
松原 隆一郎	ケインズ再考——20世紀経済の特質を考える
下斗米 伸夫	逆説の現代史
猪木 武徳	グローバリゼーションの逆説
	——二世紀の国家像を求めて
田中 明彦	テロリズムとの戦い
	——「戦後思想」をいかに構築すべきか
酒井 啓子	政権の反米、人々の反米
	——イラクとアラブ諸国の対米感情をめぐって
細谷 雄一	アンビバレントな関係
	——英米関係の百年と歴史の教訓
川島 真	「共通敵」のない時代
	——東南アジアからみた中国の台頭
白石 隆	中国の未来——「平和的発展」は続くのか
高原 明生	

第Ⅲ巻

日本論・日本文化論

司馬 遼太郎	浄土——日本の思想の鍵
日黒 依子	「国際婦人年」という黒船
渡辺 保	井伊兄弟の幕末——幻想の黒船人質
佐伯 順子	芸者と富士山——外国人の見た日本文化の深層
佐佐木 幸綱	近代・西欧・「さびし」の伝統
	——留学後の斎藤茂吉
半藤 一利	陛下ご自身による「天皇論」
河合 隼雄	日本神話にみる意思決定
山崎 正和	「インテリ」の盛衰——昭和の知的社会
白幡 洋三郎	日本人としての「暮しよま」とは
	——文化に表れる社会資本
五味 文彦	武士の変容
梅棹 忠夫	日本はアジアではない
	——クラシック・コンチネンタルズから距離をおいて

▼紙面サンプル

2006年号	2
イデオロギーと統治の間で	待鳥 聡史
2007年号	3
イデオロギーと統治の間で	3

第Ⅱ巻

政治・経済 国内編

久保 文明	アメリカの政治家はどう育てられているか
鈴木 董	トルコのEU加盟——EUにとっての二つの試金石
デーヴィッド・A・ウエチ	「アメリカ帝国」に同盟は必要か
マーク・リラ	ネオコンは終わったか
阿川 尚之	最後にして最善の希望？
土屋 大洋	帝国の磁力
待鳥 聡史	イデオロギーと統治の間で
梶田 茂樹	「砂社会」ロシアの復活
ヴォルフ・レベニス	「ヨーロッパ」は成立するか
田所 昌幸	新千年紀の予感
彦谷 貴子	ダニエル・ベル教授イタビエー
池内 恵	「アラブの春」がもたらしたものの
ジョン・ダン	等身大の民主主義観
アレクサンダー・スタイル	二極化するアメリカ
中西 寛	再臨、あるいは失われた可能性の時代
ピーター・グロセール	一九八九年に起きたことは何だったのか
池田 明史	溶解する中東の国家、拡散する脅威
岡本 隆司	清朝の崩潰と中国の近代化
中谷 巖	責任国家・日本への選択
ズビネフ・フレンスキ	日本はまだ「ひよわな花」か
高坂 正堯	「円」は新基軸通貨たりうるか
ローレンス・クラウス	なぜ改めて「ライフサイクル計画」か
蠟山 昌一	ポードーレスの経済とリーダースの政治
本間 長世	プロローグ 一九二六—一九四五
高坂 正堯	ポストモダンの選挙制度改革
曾根 泰教	政治家は軍事を、自衛隊は政治を
猪木 正道	転換期を迎えた日本型企業システム
本間 正明	社有物の研究
諸井 薫	野口 悠紀雄
森口 親司	平成不況の核心
横田 洋三	「常任理事国」日本の条件
五百旗頭 真	新世界無秩序論をこえて
	——冷戦後の世界と日本
中谷 巖	米中が「閉鎖日本」をバイパスする可能性
五百旗頭 真	満州事変——「すてじ」に出たものは仕方がない（あらずや）
高坂 正堯	「脱亜入欧」から「脱亜入洋」の時代へ
山崎 正和	

第Ⅳ巻

思想・文学・社会

ダニエル・ベル	20世紀末の危機と希望——「市民社会」の復権
山崎 正和	文明を輸出するとき
伊丹 敬之	「日本料理」の懐疑
村上 泰亮	オリビックと建築家
山崎 正和	歴史の中の多様な「性」
富永 健一	情報の氾濫と知識の貧困
	——「情報」社会は「知識」社会たりうるか
ソール・ペロ	二十世紀に文学は生き残るか？
ハーバート・パッシン	言論 戦争、そして責任
井上 達夫	「文化国家」の裏と表
鷲田 清一	日本はみずからの来歴を語りうるか
渡辺 裕	——「世界史の哲学」とその遺産
坂本 多加雄	臨床諸学の提唱
養老 孟司	身体としてのヨーロッパ
三浦 雅士	強いメッセージとしての普遍主義
村上 陽一郎	

島田 晴雄	日本型経済システムは21世紀も有効か
竹中 平蔵	日本はアジア太平洋時代の「接着剤」となれ
	——後退的思考を打破する時
高坂 正堯	安全保障感覚の欠如
	——日本に自分の運命は
	——自分の責任だという意識はあるか
久米 郁男	二大政党制という妖怪
御厨 貴	官僚制の生理と病理——葉書・イズとオウム教団
川勝 平太	明治六年の政変——明治百年の大計の誤算
伊藤 元重	市場化は改革か破壊か
	——日本の構造改革と市場化の論理
青木 保	アジアの日本・日本のアジア
佐伯 啓思	どへ行く日本経済——2極化を超えて
五百旗頭 真	明治維新における「王政」と「公議」
森口 親司	——横井小楠と久保利通を手がかりに
三谷 博	国家の弁証——二世紀日本の国家と政治
北岡 伸一	格差の拡大と機会平等の欠如
	——今の日本で起きていること
橋本 俊詔	戦後日本の憲法体制の変容と展望
田所 昌幸	憲法を考える前に——法の権威はどこから生じるか
嶋津 格	日本からみた米中関係
添谷 芳秀	人類史の転換点——世界の将来像と日本の課題
中西 寛	日本では政治家はなぜ育たないのか
筒井 清忠	政党政治はなぜ、いかに生まれたか
三谷 大一郎	英米および日本について
山室 信一	「市民」育成へのまなざし
井堀 利宏	日本財政の現状と課題
荻部 直	「大正百年」としての現在——知識人と「社会」
田所 昌幸	心地よい停滞の中の不安
中西 寛	日本人としての「市民」
小林 傳司	「国民的議論」とは何だったのか
	——原発をめぐる市民参加のあり方
空井 護	現代民主政1.5——熟議と無意識の間
牧原 出	アマチュアリズムの政治と科学
	——日本野鳥の会の戦中・戦後史
遠藤 晶久	若者にとっての「保守」と「革新」
ウイリー・ジョウ	——世代で異なる政党間対立
宇野 重規	鈍牛・哲人宰相と知識人たち
	——大平総理の政策研究会をめぐって

岩井 克人	事故の連続としての歴史
三浦 雅士	望ましい情報社会の姿とは
公文 俊平	私的なもの場所
鷲田 清一	メディア、大衆、そして知識人
西部 邁	退屈に耐える精神的成熟
西垣 通	「新しい教養」のヒント
筒井 清忠	「公」と「私」のあいだ
加藤 秀俊	自由の牢獄——リベリズムを超えて
大澤 真幸	世界の小説を読む——最新の話題作・問題作から
パール・K・ベル	現代人と宗教——無宗教としての宗教
河合 隼雄	ポストモダン再考
東 浩紀	規範はいかに語られるか
盛山 和夫	——自明世界の亀裂と学知
中島 秀人	科学論再考——現代社会における科学と平等
奥本 大三郎	花の夢
山極 寿一	共感の由来と未来
張 競	魂の幸福を語り合うこと
金森 修	3・11の科学思想史的含意
森本 あんり	幸福を追求するアメリカ人
	——反知性主義と宗教
トマシュ・ユルコヴィツチ	母語は世界言語によって磨かれる
佐藤 卓己	あるチェコ語話者の回想
	「報道の自由度ランキング」への違和感
総目次	総目次
山崎 正和	特別企画 イタビエー
荻部 直	鋭く感じ、柔らかく考えてきた三十年
田所 昌幸	特別企画 アステイオン
池内 恵	世界の思潮の把握と日本からの知的発信の試み
荻部 直	「ポスト冷戦期」を見届けた後
張 競	根源的な思考と時代の省察
細谷 雄一	技術至上の現代になぜ文学芸術が大切な
	歴史の教養と外交の叡智、
	冷戦後世界を見通す三人の歴史家
待鳥 聡史	日本政治論の不在から、
	自律した政治学に基づく発信へ